

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

令和元年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

**ハダニ等小さな害虫やハマキムシ等のチョウ目害虫発生量の確認と防除を徹底しましょう!**

本年は梅雨入りが遅く降雨が少なかったため、6月5半旬のカンキツ・ナシと茶のハダニの発生ほ場率は平年の1.5~2倍と多く、多発ほ場も散見されています。また、カキや茶のチャノコカクモンハマキ等のチョウ目害虫は、フェロモントラップでの成虫誘殺数が、平年より多い傾向にあります。

被害を軽減するため、樹上での成幼虫の発生状況の確認と防除を徹底しましょう。



ハダニ類成虫 (カンキツ)



チャノコカクモンハマキ幼虫 (カキ)

<予想される向こう1か月の天候(令和元年6月29日~令和元年7月28日)>

前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は少ないでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

|        | 平均気温                      | 降水量                   | 日照時間                   |
|--------|---------------------------|-----------------------|------------------------|
| 九州北部地方 | 低30 並40 高30%<br>ほぼ平年並の見込み | 少20 並30 多50%<br>多い見込み | 少50 並30 多20%<br>少ない見込み |

(福岡管区气象台 令和元年6月27日発表抜粋)

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

| 作物名            | 病害虫名       | 現況<br>(発生量) | 7月の発生予報<br>(発生量) |     |
|----------------|------------|-------------|------------------|-----|
|                |            | 平年比         | 平年比              | 前年比 |
| 水稲             | セジロウンカ     | 少           | 並                | 並   |
|                | トビイロウンカ    | やや少         | 並                | 並   |
| カンキツ           | 黒点病        | 並           | やや多              | やや多 |
|                | かいよう病      | 並           | やや多              | やや多 |
|                | ミカンハダニ     | 多           | やや多              | やや多 |
| ナシ             | 黒星病        | やや少         | 並                | 並   |
|                | ナシヒメシンクイ   | 並           | 並                | 並   |
|                | ハダニ類       | やや多         | 並                | 並   |
| カキ             | 炭疽病        | 少           | やや少              | 並   |
|                | フジコナカイガラムシ | やや少         | やや少              | 並   |
|                | ハマキムシ類     | やや多         | 並                | やや多 |
| 果樹共通           | チャバネアオカメムシ | 少           | —                | 少   |
| 冬春イチゴ<br>(育苗期) | うどんこ病      | 少           | 少                | 並   |
|                | 炭疽病        | 並           | やや多              | やや多 |
|                | ハダニ類       | 少           | 少                | 並   |
| 茶              | 炭疽病        | やや少         | 並                | 多   |
|                | カンザワハダニ    | 多           | 多                | 多   |
|                | チャトゲコナジラミ  | 並           | 並                | 多   |

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

\* 果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量（予報）平年比は年次変動が大きいため—としています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

## 【普通作物：水稲】

### 1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 少雨の影響で田植えが遅れ、巡回調査における6月5半旬調査は実施できなかった。ただし、県北部の調査地点外では雌成虫が確認されている（±）。

（10株当たり成幼虫数 平年0.8頭、前年0頭）

イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯では捕獲されていないが、近県では6月6～7日頃に飛来したと思われる個体を確認している（±）。

ネットトラップ0頭（平年4.1頭、前年0頭）

予察灯0頭（平年42.6頭、前年0頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 飛来成虫が多い場合、産卵部位の褐変や次世代幼虫の吸汁害により、イネの初期生育が抑制されるので、箱施薬剤を施用していないほ場では、今後の飛来状況に十分注意する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

### 2 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 少雨の影響で田植えが遅れ、巡回調査における6月5半旬調査は実施できなかった(±〜)。  
(10株当たり成幼虫数 平年0頭、前年0頭)
- イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯では捕獲されていないが、近県では6月6～7日頃に飛来したと思われる個体を確認している(±)  
ネットトラップ0頭(平年0.1頭、前年0頭)  
予察灯0頭(平年2.9頭、前年0頭)
- ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 今後の飛来状況や7月中旬以降の飛来後第1世代幼虫の発生状況に注意する。
- イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や、箱施薬剤の効果低下が心配される早植えほ場では、発生状況に注意する。
- ウ ほ場内では集中的に生息するので、ほ場全体での発生状況を確認する。

【普通作物：その他の病害虫】

1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率

(1) 本年の状況

令和元年5月に県内14地点の小麦穂からヒメトビウンカの第1世代幼虫を採集し、イネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率を簡易エライザ法で検定した。  
その結果、保毒虫率は平均0.8%で、低く推移している(図、表)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 5月下旬～6月上旬移植のほ場では、ヒメトビウンカ成虫の発生に注意し、発生が多い場合や前年度縞葉枯病が多発生した地域では、本田での薬剤防除を実施する。
- イ 次作に向けた対策として、越冬場所となるひこばえ(再生稲)を収穫後速やかにすき込み、ヒメトビウンカに有効な箱施薬剤のローテーション利用に取り組む。

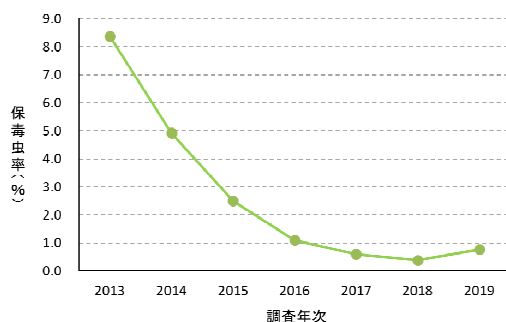


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移  
(第1世代幼虫：小麦ほ場採集)

表 検定地点別のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率

| NO. | 検定地点    | 検定虫数<br>(頭) | 保毒虫数<br>(頭) | 保毒虫率(%) |       |       |
|-----|---------|-------------|-------------|---------|-------|-------|
|     |         |             |             | 2019年   | 2018年 | 2017年 |
| 1   | 糸島市松末   | 94          | 1           | 1.1     | 0     | 0     |
| 2   | 宗像朝町    | 94          | 0           | 0       | 2.2   | 0     |
| 3   | 筑紫野市山家  | 94          | 2           | 2.1     | 1.1   | 2.1   |
| 4   | 筑前町栗田   | 94          | 0           | 0       | 1.1   | 0     |
| 5   | 朝倉市馬田   | 94          | 3           | 3.2     | 0     | 6.6   |
| 6   | 小郡市力武   | 94          | 1           | 1.1     | 0     | 0     |
| 7   | 久留米市宮ノ陣 | 94          | 0           | 0       | 0     | 0     |
| 8   | うきは市山北  | 94          | 0           | 0       | 0     | 0     |
| 9   | 嘉麻市中益   | 94          | 0           | 0       | 0     | 0     |
| 10  | 糸田町打越   | 94          | 1           | 1.1     | 0     | 0     |
| 11  | 八女市立野   | 94          | 0           | 0       | 0     | 0     |
| 12  | 大川市北古賀  | 94          | 1           | 1.1     | 1.1   | 0     |
| 13  | 柳川市大浜町  | 94          | 0           | 0       | 0     | 0     |
| 14  | 豊前市鳥越   | 94          | 1           | 1.1     | 1.1   | 0     |
| 平均  |         |             |             | 0.8     | 0.4   | 0.6   |

## 【果樹：かんきつ】

### 1 黒点病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.2% (平年 0.3%、前年 0%)

発生ほ場率 10.0% (平年 7.7%、前年 0%)

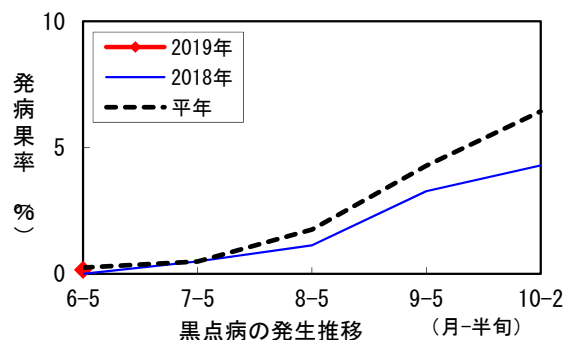
イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 梅雨時期は、前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



### 2 かいよう病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

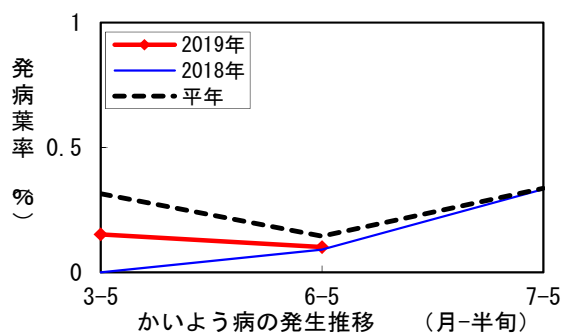
発病葉率 0.1% (平年 0.1%、前年 0.1%)

発生ほ場率 10.0% (平年 10.5%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 雨媒伝染をするため、発生が多い園では、風雨前の防除を徹底する。



### 3 ミカンハダニ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

発病葉率 25.1% (平年 15.0%、前年 3.3%)

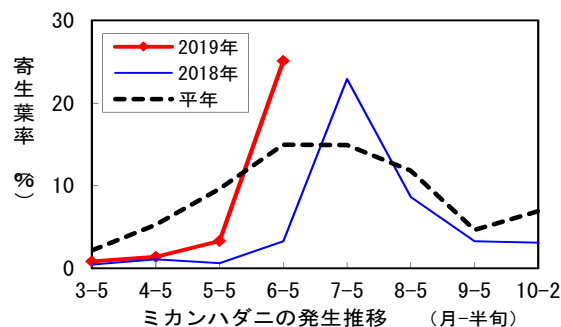
発生ほ場率 80.0% (平年 56.4%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている(-)。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 黒星病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病葉率 1.0%（平年 2.6%、前年 3.0%）

発生ほ場率 45.5%（平年 65.0%、前年 72.7%）

発病果率 0.4%（平年 1.5%、前年 1.1%）

発生ほ場率 36.4%（平年 49.9%、前年 63.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

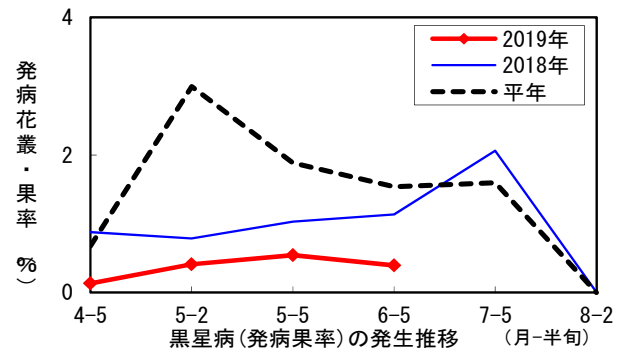
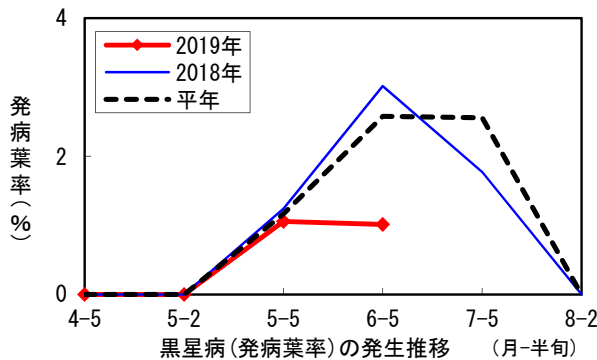
(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI剤の使用回数は年間で3回以内、QoI剤は2回以内にとどめる。

特に、DMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。



## 2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 第1～第2世代と考えられる5月1半旬～6月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、平年並であった（±）。

朝倉市杷木大山：71頭（平年 108頭、前年 58頭）

八女市黒木町木屋：64頭（平年 63頭、前年 22頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

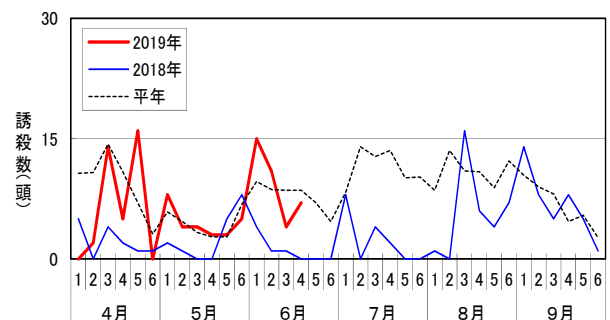
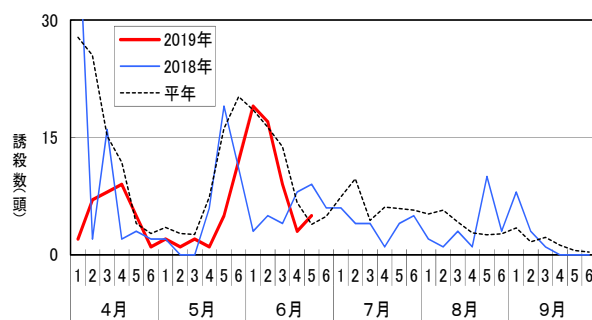
(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月以降の第3～4世代の発蛾最盛期直後（若齢幼虫期）を目安に防除を行う。

また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当っては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



### 3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+～±）。

寄生葉率 3.9%（平年 3.5%、前年 8.7%）

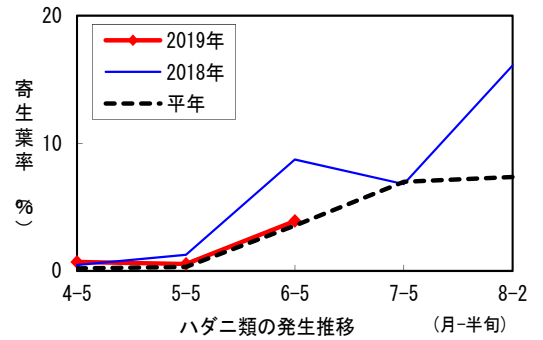
発生ほ場率 54.5%（平年 34.0%、前年 54.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（-）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に防除を徹底する。

また、薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



### 【果樹：かき】

#### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

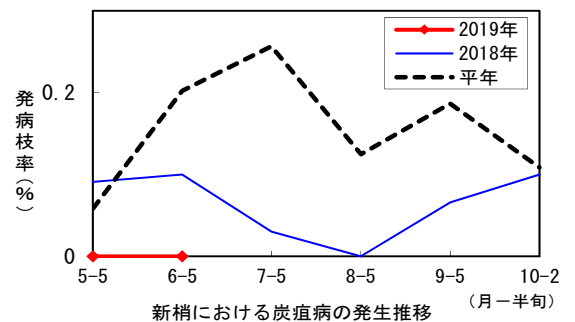
発病枝率 0%（平年 0.2%、前年 0.1%）

発生ほ場率 0%（平年 12.3%、前年 10.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



#### 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生果率 1.6%（平年 4.9%、前年 1.9%）

発生ほ場率 63.6%（平年 65.4%、前年 70.0%）

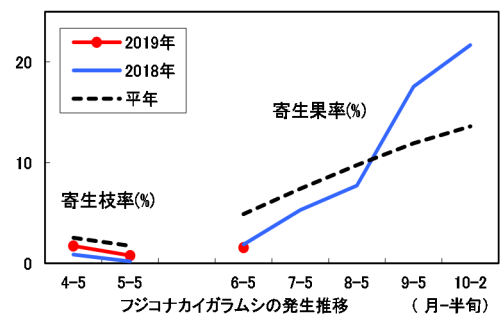
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。

イ 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



#### 3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 越冬～第1世代と考えられる4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年よりやや多かった（±～+）。

＜調査地点はうきは市、平年値は2016～18年の平均＞

誘殺数 チャノコカクモンハマキ 633頭（平年 471頭、前年 387頭）  
 チャハマキ 40頭（平年 37頭、前年 33頭）

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

発生果率 0.3%（平年 0.2%、前年 0%）

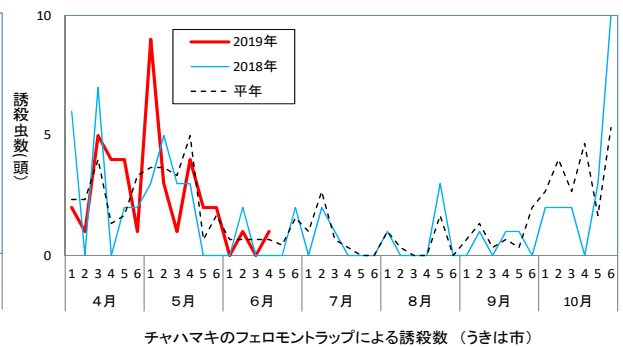
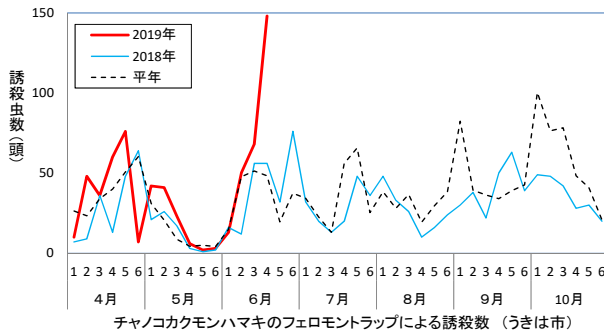
発生ほ場率 27.3%（平年 12.9%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 成虫の発生に注意し、発生が多い園では8月上～中旬の防除を徹底する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

(2) 予報の根拠

ア 県内28地点のヒノキ球果着生量は前年並であった（±）。

＜過去10年間の越冬量とヒノキ球果着生量の年次推移＞

| 年/項目                             | 2010       | 2011     | 2012     | 2013     | 2014     | 2015       | 2016       | 2017       | 2018     | 2019     |
|----------------------------------|------------|----------|----------|----------|----------|------------|------------|------------|----------|----------|
| チャバネアオカメムシ越冬量(頭/m <sup>2</sup> ) | 2.1        | 0.6      | 3.2      | 0.7      | 4.8      | 0.9        | 0.8        | 0.9        | 3.8      | 0.8      |
| ヒノキ球果着生量 <sup>注)</sup>           | やや少<br>3.0 | 中<br>4.5 | 少<br>2.2 | 中<br>4.1 | 中<br>3.5 | やや少<br>2.8 | やや少<br>2.8 | やや多<br>5.0 | 中<br>4.4 | 中<br>3.6 |

注) 5月5半旬～6月2半旬調査 → ヒノキ球果の豊凶基準に基づき、極少を1～極多を7として、全体の平均値を算出

イ 4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は、前年より少なかった（－）。

誘殺数 227頭（前年 3,288頭、2013年 1,042頭）＜筑紫野市＞

26頭（前年 210頭、2013年 0頭）＜宗像市＞

362頭（前年 260頭、2013年 欠測）＜うきは市＞

12頭（前年 105頭、2013年 欠測）＜八女市＞

ウ 4月1半旬～6月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は、前年より少なかった（－）。

誘殺数 156頭（前年 1,617頭、2013年 欠測）＜筑紫野市＞

31頭（前年 290頭、2013年 13頭）＜朝倉市、6月3半旬まで＞

43頭（前年 668頭、2013年 178頭）＜久留米市＞

5頭（前年 29頭、2013年 33頭）＜うきは市＞

46頭（前年 729頭、2013年 7頭）＜飯塚市、6月2半旬まで＞

\*イ・ウについては、越冬量と球果着生量が類似している2013年を、参考値として記載。

エ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来や被害発生状況は地域や園により異なり、局所的に発生が多い地域も見られるので、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 今後の発生状況等については、病害虫防除所ホームページを参照する。

<<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 2.6%（平年 14.1%、前年 9.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

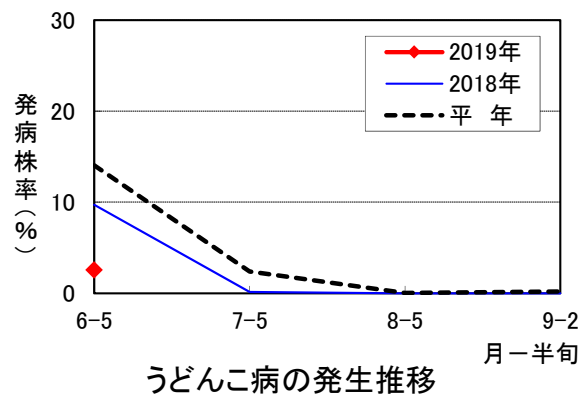
(3) 防除上の注意

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 発生した株については葉かきを強めに行い、伝染源である発病葉を取り除くよう努める。また、摘葉後には薬剤防除を徹底する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する。（以下の病害虫についても同様）



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.01%（平年 0.02% 前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

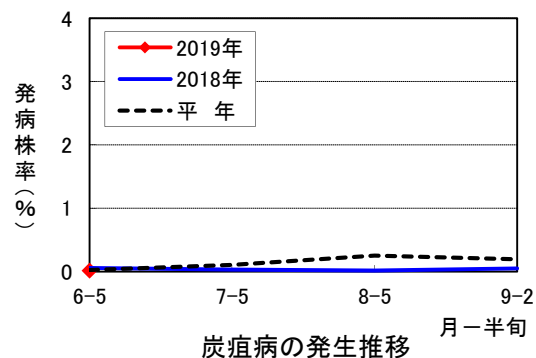
ア 採苗が終わった親株は、速やかに育苗ほから撤去する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

ウ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する。

エ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと発病しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

オ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

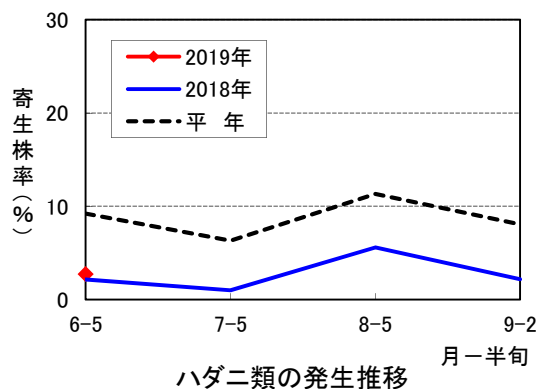
ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生株率 2.7%（平年 9.2% 前年 2.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上の注意

ア 採苗が終わった親株は、速やかに育苗ほから撤去する。



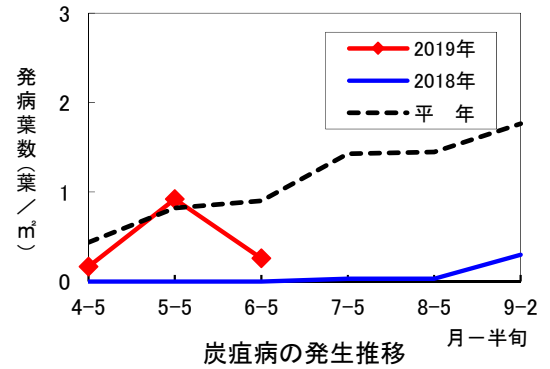


- イ 葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。
- ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- エ 多発後の防除は困難になるので予防散布に努める。
- オ 抵抗性が発達しないように異なる系統の薬剤で定期的に防除を徹底する。
- カ 土着天敵を活用するため、天敵に影響の少ない薬剤をローテーション散布する。

**【茶】**

**1 炭疽病**

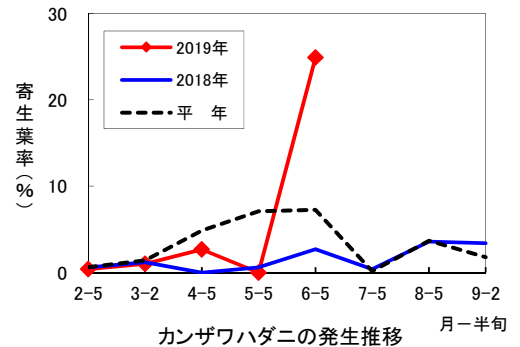
- (1) 予報の内容  
発生量：平年並、前年より多
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。  
発病葉数 0.3葉（平年0.9葉、前年0葉）  
発生ほ場率 67%（平年30%、前年0%）  
イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。



- (3) 防除上の注意  
ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。  
イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、できる限り降雨前日までに防除を実施する。  
ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

**2 カンザワハダニ**

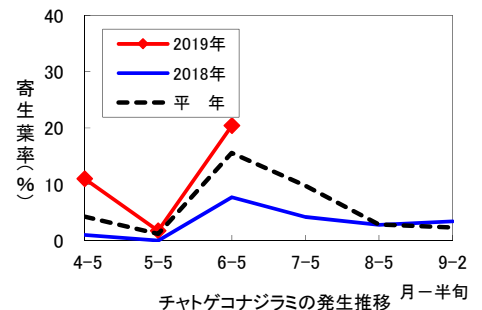
- (1) 予報の内容  
発生量：平年・前年より多
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。  
寄生葉率 24.9%（平年7.3%、前年2.7%）  
※激発ほ場を除いた場合の寄生葉率は、3.7%  
発生ほ場率 67%（平年29%、前年33%）  
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。



- (3) 防除上の注意  
ア 一部のほ場では激発しているため（寄生葉率 100%）、多発している園ではチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマの防除と併せて、効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。  
イ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

**3 チャトゲコナジラミ**

- (1) 予報の内容  
発生量：平年並・前年より多
- (2) 予報の根拠  
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並だった（±）。  
寄生葉率 20.4%（平年15.6%、前年7.7%）  
※激発ほ場を除いた場合の寄生葉率は、8.6%  
発生ほ場率 78%（平年83%、前年76%）  
※ チャトゲコナジラミの平年値は過去6カ年平均  
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。



- (3) 防除上の注意  
ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫発生期である。防除適期は例年7月中～下旬頃であるが、天候によって変動するので、発生状況をよく観察し、親世代成虫の発生が収まった頃に防除を行う。  
イ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧

に散布する。

【茶：その他の病害虫】

| 病害虫名             | 現況<br>(発生量) | 7月の発生予報<br>(発生量) |     | 防除上注意すべき事項等  |
|------------------|-------------|------------------|-----|--|
|                  | 平年比         | 平年比              | 前年比 |  |
| チャノミドリ<br>ヒメヨコバイ | 並           | 並                | 並   | ・発生状況をよく観察し、たたき落とし（B5判上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。<br>・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。   |
| チャノキイロ<br>アザミウマ  | 少           | 少                | 少   | ・発生状況をよく観察し、たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。<br>・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。  |
| チャノコカク<br>モンハマキ  | やや多         | 並                | やや多 | ・第2世代成虫の発蛾最盛期については、天候によって変動するが、チャノコカクモンハマキは7月下旬頃、チャノホソガは7月上～中旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。<br>・チャノコカクモンハマキ、チャノホソガのいずれも巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。 |
| チャノホソガ           | 少           | 少                | やや少 |  |

**農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！**

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

**1 農薬適正使用の徹底**

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

**2 飛散防止対策の徹底**

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

**3 保護具の着用**

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

**4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄**

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

**5 防除履歴の記帳**

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

**6 空容器の処分**

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況